

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	南口 健一	指導教員 (主査)	田中 勝博

論文題目	<b>自叙写真法を用いた自己表現に関する探索的研究</b>
------	-------------------------------

## 本文概要

### 問題と目的

昨今、スマートフォン等で誰でも簡単に写真を撮影することが可能になった。また、各種 SNS の普及など、写真は我々にとって親しみやすい表現方法となった。そして、写真をめぐる一連の行為は全てが撮影者の選択と決定を必要とする極めて主体的・能動的な行為であると言える(向山, 2010)。写真は絵画と違い作る表現ではなく選ぶ表現である(渡辺, 1975)。そのため、表現者は何を見せて何を見せないかの選択を容易に行うことが出来ると考えられる。また、イメージ表現の選択にあたっては、クライアント自身の持つ関心に応じてコミュニケーションの場を選択することも重要である(山中, 1976)。自叙写真法とは“あなたは誰ですか”という問いかけに、写真で回答し、その写真を通して、撮影者が世界をどのように理解し経験しているかを把握する方法である(Combs&Ziller, 1977)。そして、本邦では自叙写真法について向山(2010)の研究がある。向山(2010)は、自叙写真法が自己表現の方法となる可能性や、クライアントの内的世界を示す豊富な資料として臨床現場への適応可能性についても示唆した。しかし、向山の研究では、セラピストの視点を重視した研究であり、クライアントの体験については詳細な内容が検討されていない。そこで、本研究は自叙写真法のクライアント体験の特徴を質的に検討することを通じて、その体験内容の特徴について検討することを目的とする。

### 方法

調査協力者は 20 歳以上の大学生 11 名(男性 3 名, 女性 8 名), 平均年齢は 21 歳(SD=1.34)。手続きは調査協力者それぞれに自叙写真法の課題について事前説明を行い撮影を依頼。課題の教示は、周囲にある自分を表すものを 12 枚撮影して自分を表現するという内容で向山(2010)の研究を参考とする。また、使用するカメラはスマートフォンとする。2 週間の撮影期間終了後、個別に面接を実施。面接では撮影された自叙写真についての質問とアルバムの作成を行い、体験内容について半構造化面接によるインタビューを実施する。分析方法は、体験内容についての質問項目によって得られた会話データ部分のみを使用し、KJ 法(川喜多, 1967 ; 川喜多, 1970)の手続きに従い分析を行う。

### 結果

インタビューデータより 59 枚の単位が収集された。そして 17 の小グループ、6 つの中グループ【抵抗感】【心地よさ】【戸惑い】【新鮮さ】【自己に対する気づき】【発見】、2 つの大グループ《感情》《気づき》が生成された。

### 考察

調査協力者は調査者と、自分でありながら自分そのものではない対象が映された写真を「共に見ることと語り」として、コミュニケーションが生まれ(やまだ, 2005)自己について語る体験が生じたと思われる。そして、それまではっきりと意識していなかった、写真に写された意味を見つけ、言語化する体験があったと考えられる。特に新鮮な体験から端を発する《感情の変化》が、次第に自己の《気づき》へと至り自己の再認識が進んだと思われる。

### 主要な参考文献

向山 泰代 (2010). 自叙写真法による自己認知の測定に関する研究 ナカニシヤ出版